北海道大学内にあるアイヌ納骨堂前でたたずむ木村和保さん＝札幌市北区で7月29日、竹内幹撮影

アイヌの名誉回復を

―首長の遺骨　子孫に返還へ

Sストーリー

「まるで標本室のようですね」

北海道大（札幌市）の医学部駐車場の片隅に、コンクリート造りの「アイヌ納骨堂」がひっそりとたたずむ。樺太（サハリン）に暮らしていた樺太アイヌの子孫、木村和保さん(63)＝横浜市在住＝がつぶやいた。アイヌの人たちでも中に入ることはほとんど許されず、年に1度の慰霊祭以外はシャッターを下ろしたままだ。

ここには北海道や千島列島、樺太から集められたアイヌの遺骨1000体以上が眠っている。多くは19世紀後半から1970年代にかけ、研究を目的に墓地などから持ち去られた。盗掘や遺族の同意を得ないケースもあり、動物の骨などと一緒に乱雑に扱われた。アイヌの抗議を受け、北大は84年にようやく納骨堂を建てる。

今夏、この中の1体が木村さんに返還されることが決まった。樺太東海岸の集落の首長、バフンケ（1854年ごろ～1919年、日本名・木村愛吉）。漁業で財を成した有力者で、生前の写真や逸話の残る人の遺骨返還は初めてだ。バフンケのめいのチュフサンマは、ポーランド貴族出身でロシアの政治犯として樺太に流刑されたブロニスワフ・ピウスツキ（1866～1918年）と結婚した。木村さんは彼らの孫に当たる。

バフンケら一族の暮らしは日露戦争をきっかけに暗転する。欧州に戻ることになったピウスツキは妻子を連れて行くことを諦め、単身渡航。ポーランド独立運動に身を投じ、パリで自ら命を絶った。一族は当時の強制移住政策で、住み慣れた土地を追われた。

「バフンケの墓が掘り返された経緯には、まだ分からないことが多い」。先祖の、そして民族の名誉回復を求める木村さんは言う。近現代史の巨大な流れに翻弄された、ある家族の物語をひもとく。

4面につづく

取材・文　三股智子

遺骨持ち去り なぜ

アイヌ首長バフンケの歩みたどり

Ｓストーリー

今回のＳの取材は

担当した三股記者

三股智子（さいたま支局）

2009年入社。青森支局、東京校閲グループ、北海道報道部、熊谷支局を経て昨年10月から現職。埼玉県内の話題や事件事故を担当する傍ら、北海道報道部時代からアイヌ民族の遺骨問題の取材を続けている。

樺太と欧州 悲恋も

1面からつづく

「樺太アイヌの首長、バフンケの遺骨が北海道大に保管されていることが分かりました。木村愛吉さんらしい」

横浜市で電気工事会社を営む木村和保さん(63)のもとに、旧知の北大名誉教授、井上紘一さん(77)から電話があったのは2016年夏のことだった。

「愛吉」については、祖母でアイヌのチュフサンマにつながる親戚の一人という程度の認識しかなく、詳しい人物像は知らなかった。「なぜ愛吉の遺骨が大学に?」。突然の話に驚き、戸惑った。

やがて木村さんは、バフンケの生涯やその遺骨がたどった運命を知るにつれ、アイヌとしての誇りとともに差別への憤りを強めることになる。

〜

バフンケは1854〜55年ごろ、樺太南部の東海岸中部を治める首長の家に生まれたとされる。幕末の日本がロシア帝国と日露和親条約を結んだ頃。択捉島の北に国境線が引かれた一方、樺太には国境を設けず、両国民の混住の地にすることが決められた。樺太は元々、アイヌやウィルタ、ニブフといった少数民族が住み、交易などを通じて大陸や北海道と交流してきた島だった。

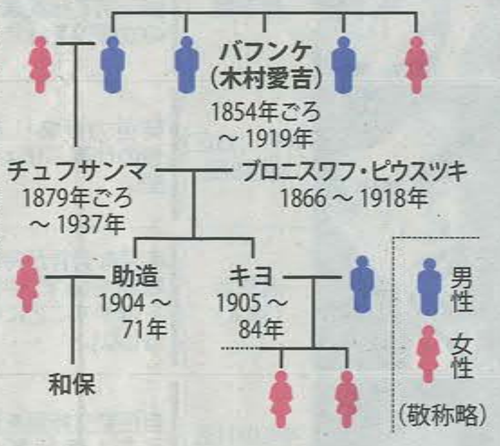
樺太アイヌの教育者、千徳太郎治の「樺太アイヌ叢話」などによると、バフンケは日本語とロシア語に堪能で、サケマス漁で財を成し、集落「アイ（日本名・相浜）」の首長を務めながら近隣集落にも影響力を誇った。樺太・千島交換条約で樺太がロシア帝国領になってからは、ロシア政府の許可を得て二つの漁場を経営。日本人漁業家から資金を受け、ニシンやサケの定置漁を営んだ。

87年夏、ポーランド貴族出身の青年、

ピウスツキ没後100年記念の講演会で、ピウスツキの生涯と業績を紹介する井上紘一・北海道大名誉教授＝札幌市北区の北大で７月29日、竹内幹撮影

ピウスツキが撮影した、樺太アイヌの首長バフンケとされる男性＝「ブロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所通報」12号より

バフンケ一族の家系図



少数民族の子どもたちに囲まれたピウスツキ（中央）＝ポーランド広報文化センター提供

ツイッター（@mainichistory）発信中です。ストーリーの掲載日に執筆記者の「ひと言」を紹介しています。

ブロニスワフ・ピウスツキが樺太に上陸する。大学生だったピウスツキは、弟ユゼフとともにロシア皇帝アレクサンドル3世暗殺計画に関わったとして、流刑を言い渡されていた。樺太北部で苦役に服するうちに、近くに住むニブフと交流を深め、少数民族の言語や文化の調査・資料収集に力を注ぐようになった。

樺太アイヌの有力者と、流刑囚の青年研究者――。2人の出会いを、ピウスツキ研究の第一人者である井上さんは「1902年ごろ」とみる。その年の暮れ、

ピウスツキ撮影の樺太アイヌ。長男助造さんを抱くチュフサンマ(右から3人目)とその親族とみられる＝「ブロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所通報」12号より

ピウスツキはバフンケがアイに建てたロシア式丸太小屋に住み始めている。

もう一つの出会いもあった。同じ年、東海岸のあるアイヌ集落で、飼育してきた若いヒグマを神の世界に送り出す「熊祭り」が営まれた。アイなど周辺の集落からも参加する大がかりな儀式で、ピウスツキは詳細な記録を残している。その熊祭りに、バフンケの兄が娘のチュフサンマを連れて参加したのだ。彼女は集落でも有名なピリカメノコ（美女）だったという。チュフサンマは両親に反対されながらもピウスツキと愛をはぐくみ、03年秋に結婚。1男1女に恵まれた。長男が木村さんの父、助造さん（04～71年）である。

一族と結びついたピウスツキは丸太小屋を拠点に、樺太や北海道の少数民族調査やアイヌ子弟の学校設立に走り回る。樺太アイヌ語の音声を録音したろう管レコードなど、貴重な資料も残した。

井上さんがピウスツキを知ったのは大学生の頃だ。弟のユゼフ・ピウスツキはポーランド独立の立役者で世界史にも登場する著名な人物。だが、その兄が日本やアイヌと関わりが深い民族学者であることは、あまり知られていない。波乱の人生や少数民族研究における業績が若き日の井上さんの心をとらえた。

研究者となった70年代、北方ユーラシアの民族学を専攻した井上さんはソビエト連邦（当時）に10カ月滞在し、ピウスツキについて本格的な文献調査を始めた。ピウスツキが残したろう管レコードはポーランドに保管されていた。当時の日本の最新技術で録音内容を再生するプロジェクトも推し進めた。

「ピウスツキの娘が北海道にいるらしい」。プロジェクトが動き始めたころ、人づてに情報がもたらされた。北海道十勝地方の大樹町を訪れると、ピウスツキとチュフサンマの長女、キヨさん（05～84年）が暮らしていた。しかし、井上さんが両親のことや樺太での思い出を聞き出そうとしても「知らない」とかたくなに口を閉ざした。別れ際のつぶやきには父親への複雑な思いがうかがえた。「家族を捨てたやつなんか……」

幸せな家庭を壊したのは日露戦争（04～05年）だった。チュフサンマらに取材して書かれた「北蝦夷秘聞」などによると、ピウスツキは戦争が激化した05年に調査を断念してアイに戻り、樺太を離れるために研究資料をまとめた。長女を妊娠中のチュフサンマを連れていこうとしたが、バフンケらの強い反対に遭ったとみられる。まだ雪の降る3月、ピウスツキは妻子を置いてアイを離れ、犬ぞりを北に向かって走らせたという。終戦後の同年秋、ピウスツキは再びアイを訪れたが、バフンケらの反対は覆らなかった。それが最後の樺太訪問となった。

バフンケは日露戦争中、ロシア語通訳として日本軍のために働いた。戦後は日本政府の樺太庁から東海岸のアイヌ集落を代表する立場に任命された。だが、漁場は日本人に奪われ、樺太庁によるアイヌ集落の強制移住計画が持ち上がるなど、次第に状況は悪化していった。バフンケは19年末に死去。翌年から移住計画が本格化し、21年夏には北に約10キロ離れた密林地に造成された新集落に周辺10集落が移った。バフンケの墓地があったアイも無人になったとみられる。

一方、ピウスツキはオーストリア統治下のポーランドに戻った。研究論文を発表しながら欧州を転々とし、ユゼフとも連携して独立運動に奔走。しかし精神的に衰弱した18年5月、パリでセーヌ川に身を投げて51年の人生を閉じた。ポーランドが独立して弟ユゼフが初代国家元首に就く半年前のことだ。

チュフサンマは、その後も樺太で暮らし、37年に亡くなった。樺太アイヌの男性と再婚し、晩年は盲目となったものの、子や孫に囲まれての穏やかな老後生活だった。

慰霊の在り方これから

「父さん、ポーランド人だったの？」

木村さんは高校生の頃、助造さんに聞いてみたことがある。助造さんは第二次世界大戦後に樺太から北海道・富良野へ移住した。樺太やアイヌの話を一人息子にすることはなかったが、チュフサンマとピウスツキの悲恋物語は当時、新聞や言語学者・金田一京助の著書などに紹介され、知られた話だった。木村さんも父の同僚らが口にする断片情報から、自分たち家族がポーランドに関係していることにうすうす気付いていた。

息子の問いに、助造さんはさっと顔色を変えた。母がとりなし、それ以上は聞けなかった。アイヌというだけでも差別された時代。「父は樺太に過去を捨ててきたのだろう」と思いやる。

木村さんが初めて井上さんの訪問を受け、確かな情報として祖父母がピウスツキとチュフサンマと伝えられたのは助造さんの死後、1980年ごろだった。ただ、両親が作った過去帳には、助造の父の欄に「愛吉」とある。ピウスツキが樺太を去った後、バフンケは夫、父親代わりとしてチュフサンマと2人の子供たちを保護したのかもしれない。

ここで「遺骨」の話に戻ろう。

井上さんは北大が2013年に公表したアイヌ人骨収集に関する調査報告書を読んでいて「バフンケ」の記述があることに気付いた。報告書によると、北大は1931～72年に道内46市町村と樺太、千島列島でアイヌの遺骨1000体以上を集めた。その中の1体がバフンケだった。ピウスツキ研究を通じ一族に関わった者として、首長の遺骨が墓地から持ち去られていたことに衝撃を受けた。「遺族への返還が自分の務めだ」。使命感に突き動かされ、木村さんに報告した。

木村和保さんはピウスツキの孫として没後100年記念の講演会に招かれ、「彼の研究が後世に伝わればうれしい」と述べた＝竹内幹撮影

バフンケが生きた時代は、日本が西欧列強の植民地政策に倣い、帝国主義を育てていった時期に重なる。欧米では人間の頭骨の研究への関心が高まっていた。形や大きさを測定することで「人種」の特徴や優劣を明らかにできると考えられていた。アイヌ民族は「最も原始的」とみなされ、より注目が集まった。

ただし、墓地を暴いて遺骨を持ち去ることは、当時から重大な「犯罪行為」とみなされていた。幕末の1865年には箱館（現・函館）の英国領事館員らが近郊のアイヌ墓地から遺骨を持ち去り、外交問題に。関係者が処罰された。

国内では明治時代、ドイツなどに留学して医学を学び、解剖学や人類学に触れた医師や研究者が続々と帰国した。彼らは「日本人の起源解明」を掲げ、アイヌの遺骨を欲しがった。地域の教育関係者や考古学愛好家らも協力し、墓地から大量の遺骨が持ち去られた。墓地改葬や土木工事などで見つかった遺骨までもが、大学や博物館に運び込まれた。

全国最多の1000体以上を保管する北大で収集の中心となったのが、医学部の児玉作左衛門教授（1895～1970年）だ。北大の報告書によると、児玉氏は「静かに眠っているものを妨げるのはよくない」と抗議するアイヌを説得し、発掘を続けた。新聞報道で活動を知った北海道庁刑事課から、取り調べを受けたこともある。発掘の「許可」は和人（アイヌ民族ではない日本人）の土地所有者や行政から取っていた。

1936年7～8月、児玉氏は樺太東海岸の複数の集落で墓地を掘り返した。北大が今年8月に公表した調査報告書によると、アイ近郊に住む元小学校長の男性にアイヌ説得を依頼した。児玉氏へ宛てた結果報告の手紙には〈「さびしいからそばにおきたい」と言うばかりで、承諾する者はいなかった〉とある。結局、児玉氏は樺太から49体以上を持ち去った。

北大が保管する遺骨の台帳には、管理番号「相浜1」の項目に「バフンケ　昭和十一年八月発掘」とある。バフンケの死後、わずか16年しかたっていない。

木村さんは昨年4月、井上さんの協力を得て北大に遺骨の返還を申請し、今年7月に認められた。ところが大学側との面談で、台帳には全身の遺骨と記載されているのに、学内に保管されているのは頭骨だけであることが分かった。副葬品は児玉氏の私的コレクションに紛れ、市立函館博物館に保管されていた。

それだけではない。大学側が明らかにした「遺骨提供承諾書」にはバフンケの相続人男性の名前が書かれていた。代筆が疑われる筆書きの漢字でつづられ、日付欄も空白だった。木村さんは言う。

「こんなずさんなやり方でアイヌの墓を暴くことが、研究目的だからといって許されるのか。北大だけに限らず学術界全体で考えてほしいんです」

どう弔うかという問題もある。訴訟などを経て北大から遺骨の返還を受けた各地のアイヌ団体は、それぞれの土地で、伝統的な慰霊の儀式を執り行ったうえで埋葬している。木村さんは91年、いとこにあたるキヨさんの2人の娘と一緒に、ロシア領となった樺太を訪ね、かつてアイ集落があった場所を訪れたことがある。オホーツク海に面した広い砂浜と、見渡す限りの草原。集落や墓地があったことを示すものは何もなかった。

「樺太から持ち出された他のアイヌの遺骨と一緒に埋葬するのがいいのかもしれませんね」。木村さんは北海道にある樺太アイヌの遺族会と連携しながら、慰霊の在り方を探るつもりだ。

ピウスツキの没後100年となる今年はイベントが相次ぐ。7月29日、北大であった記念講演会では井上さんがピウスツキの生涯と仕事について語ったほか、木村さんも登壇し「このつどいが彼の功績紹介と、少数民族の尊厳とアイデンティティーを確認する場になれば」とあいさつした。感無量の表情だった。

この記念すべき年にバフンケの遺骨返還が決まったのは偶然なのか。「持ち去られたアイヌの遺骨」という人権侵害は解決していない。アイヌを愛し、同化し、その文化を世界に紹介しようとした人がそれを見たら、何と言っただろうか。